

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

巻頭のことば

著者	加藤 昌彦
雑誌名	関西外国語大学人権教育思想研究
巻	15
ページ	1
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005722/

巻頭のことば

人権教育思想研究所所長 加藤 昌彦

人生はどこで明暗が分かれるかも知れない。昨年9月に亡くなられた門田秀夫・本研究所初代所長は、広島で被爆される可能性があった。先生が18歳の時、広島の陸軍連隊本部から召集がきた。その直後、広島壊滅の報せを受け、急いで広島に駆けつけようとしたが父親に本部指示を待つように言われた。もし、先生が駆けつけていたら、市街で被曝されていたかもしれない。その時の判断・行動が、先生の人生を左右した。先生は後に被爆者ご自身の人生を思って、「なんか、こう、後ろめたい気がしてならない」と話されている。

しかし、暗を十分に予想でき、避けうる災いもある。昨年3月の福島原子力発電所の事故は、多くの人が予想していないことであったが、予測していた人も少なくない。原子力発電は原爆と同じ核分裂反応を利用する。現代の製品は、危険がないか繰り返して実験をして、ようやく世に送り出す。しかし、原子力発電は正確な意味で実験が出来ない。実験中に事故が起これば大惨事になる。1986年のチェルノブイリ事故も実験中の事故であった。人間にはエラーがつきまとうが、原発はエラーが許されない。エラーがどんな惨事を招くか、福島事故が痛ましく訴える。人類は核をコントロールできない。核はウランの掘削時から廃棄まで放射能に満ちている。放射能に直面して働かざるを得ない労働者は、社会の最も厳しい条件にいる。また原発は過疎で、政治の陽の当たらなかつたところが選ばれる。そして、いったん事故が起きれば、核物質の拡散が、どのような範囲で人々を窮地に追いこむかわからない。償えない、償いきれない暗をもたらす。事故後の被災者と被災地は、冷たい世間とも関わなくてはならない。放射能汚染は程度の差はあれ、スローデス（緩慢な死）をもたらす。日本列島は狭く逃げる所がない。日本は核被害を大きく3度にわたって受けた。ノーモアを繰り返してはいけない。過剰なエネルギー消費文明のあり方を急いで考え直さねばならない。